

フィルムは語る

▷▷7

太田 米男

私の恩師でもある依田義賢といえは、溝口健二監督の『雨月物語』や『近松物語』などの傑作を世に送り出した日本映画を代表する名シナリオ作家である。しかし、今では『スター・ウォーズ』に登場するヨーダのモデルではないかといううわさの方で有名になった。生前の一九八七年、依田の映画『僕らの弟』(二三年、春原政久監督)が、向日市にある女子高校で見つかった。残存する唯一の依田の無声映画であった。16ミリフィルムには『非常時涙の少年』の副題が付いていた。

母を亡くし、父は出稼ぎ、残された兄弟の物語である。幼い弟がいるために学校へも

行けず、欠席がちな長男。それを知った訓導(担任)は校長の許可を得て、兄弟一緒に登校して机を並べて勉強することを勧める。同級生も「僕らの弟」と励ますというあらすじだ。

三三(昭和八)年は満州建国に際し、日本は孤立を深め、国際連盟を脱退した年。文部省は非常時政策を押し進める。映画に関しても、「映画国策樹立に関する建議」が上程され、官民合同で映画統制会が創設された。戦争への泥沼にまい進する時代だった。

依田は左翼的なヒラを配っていたため、銀行を解雇され、映画界に入った。傾向映画の

僕らの弟—非常時涙の少年—

発見作品が映す人間模様



無声映画「僕らの弟」は作品に隠れた二つの物語を伝える

流れをくむ社会派の作品として描く。だから『非常時涙の少年』の題名に不快感を持った。なぜ、そのような副題が付いたのか、依田には記憶がなかった。

舞台は、大阪此花区にある

四貫島小学校。戦前の資料は全く残っていない。戦後、校長が「戦前の教育が間違っていた」とすべての資料を焼き捨てたという。当時、生徒だった方たちには会えたが、みんな高齢ではっきりした話は聞けなかった。ただ、モデルになった先生が存命で九十五歳(当時)だという。会えないとは思いつつ、お宅を訪ね、夫人から話が聞けた。

この物語は、新聞記事が元になって映画化されたことが分かり、さらに、もう一本の映画の存在も判明した。それが『非常時涙の少年』だった。

『非常時涙の少年』は、新聞記事の表題。調べると、新聞に出た翌日、早速「人の情けに報いる会」が発足し寄付が集まる。日活が映画化を発表。新聞社も本人たちを使つての再現ドラマを制作する。これが『非常時涙の少年』(大阪毎日製作だった。記録には、小学校の校庭で父子を招き上映会があり、六千人が見たとある。

返しをしない」と父が言い、長男が「はい」とうなずくところで終わる。時代が時代だけに、兄弟のその後を知りたくなかった。夫人の話では、その後、兄弟とは連絡が途絶えたという。同窓会でも探してみなかったが、結局消息はつかめなかった。

『僕らの弟』が16ミリフィルム化される際、有った『非常時』が副題になった。『僕らの弟』の兄役の中村英雄は、『丹下左膳』のちよび安などで天才子役とつたわれたが、戦病死した。

恩師依田が脚本にした映画の復元をきっかけに、映画が語る意味の深さを改めて教えてくれた。

◇
古いフィルムがあれば、090(8881)4689へご連絡を。
(大阪芸術大教授) 〆おわり